

日本ロレンス協会第48回大会プログラム

◎日 時：2017年7月22日（土）、23日（日）
◎会 場：東洋大学白山キャンパス2号館16階スカイホール
住 所：〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20
連絡先：東洋大学文学部 倉田雅美研究室
Tel.03-3945-8293（倉田研究室）
e-mail: mkurata226@msn.com
mkurata@toyo.jp

◎交通アクセス：都営地下鉄三田線「白山」駅より徒歩5分
東京メトロ南北線「本駒込」駅より徒歩6分

◎昼食のご案内：22日（土曜日）は8号館1階のレストラン、6号館、8号館地下の食堂、3号館1階・地下の食堂が営業しておりますので、ご利用下さい。

◎宿泊のご案内：プログラム最後に宿泊施設をリストにして掲載しましたので、ご参考にして下さい。

【役員会】

日 時：7月22日（土）10:30～12:30
場 所：東洋大学白山キャンパス2号館16階スカイホール
※ 昼食を用意します。代金は当日お支払い下さい。

第1日目：7月22日（土曜日）

受 付：12時30分より
総合司会：石和田 昌利（東洋大学文学部教授）

◎ 開会の辞：会長 浅井 雅志（京都橘大学教授）（13:00）
◎ 開催校挨拶：矢口 悦子（東洋大学文学部長）（13:05）

研究発表

司会 橋本清一（青山学院大学教授）

1. 13:10-13:45

Mr. Noon にみるセクシュアリティの問題と男性の連帯が示すもの

川田 伸道（同志社大学嘱託講師）

2. 13:45-14:20

ロレンス / メルロ＝ポンティのセザンヌ論の切り開く地平 ～モダニズム(美術)批評と「視触覚」

神徳敦子（慶應義塾大学非常勤講師）

司会 岡山 勇一（松山大学名誉教授）

3. 14:20-14:55

D.H.ロレンスの押韻詩 “The Piano” の改稿をめぐって

倉持 三郎（東京学芸大学名誉教授）

*休憩 14:55-15:05

ワークショップ D・H・ロレンスと労働（者階級） 15:05-17:35

司会 近藤 康裕（慶應義塾大学准教授）

The Rainbow における歴史と労働（者階級）——テキストはどのように〈矛盾〉を扱っているか
講師 近藤 康裕（慶應義塾大学准教授）

労働争議と小説——D・H・ロレンスとエレン・ウィルキンソンの「ゼネラル・ストライキ文学」
講師 井上 麻未（聖路加国際大学教授）

Kangaroo における社会主義批判
講師 加藤 彩雪（日本女子大学大学院生）

◎ 総会 17:45-18:25

◎ 懇親会 18:30-20:30

場所： 東洋大学白山キャンパス 2号館 16階スカイホール

会費： ¥5,000（大会当日受付でお支払い下さい）

第2日目： 7月23日（日曜日）

シンポジウム 情動、共感、D. H. Lawrenceとその周辺 9:30 - 12:00

司会 武藤浩史（慶應義塾大学教授）

D・H・ロレンスの反心理学、あるいはその情動論的可能性の再読

講師 遠藤不比人（成蹊大学教授）

文学的経験と「多元的呑気主義」

講師 井川ちとせ（一橋大学大学院教授）

Sons and Lovers と *The Rainbow* ——情動と共感とヴィジョンと間主観性

講師 武藤浩史（慶應義塾大学教授）

◎閉会の辞： 副会長 田部井世志子（北九州市立大学教授）

研究発表

Mr. Noon にみるセクシュアリティの問題と男性の連帯が示すもの

川田 伸道（同志社大学嘱託講師）

1984年に全編が刊行された *Mr. Noon* においては、主人公 Gilbert の女性に向ける眼差しが一部と二部では大きく異なっている。第一部で「いちやつき」の「名人」とされる彼は、性に奔放な Emmie を遊び相手として軽視する一方、第二部では Johnna の性的快楽主義に対して理解を示す。Gilbert の女性に対する態度の差異に矛盾と疑問を見出す先行研究も存在するが、本小説のセクシュアリティの問題を考察するにあたり、主人公と女性との関係に焦点をあてるだけでは不十分であろう。Gilbert は、Johnna との「完璧」なる性の結びつきを称えながらも、男性の連帯に対する憧れを示したり、女性との関係からの解放を願ったり、Johnna の不貞の相手である Stanley に対する好意をも表明したりしているからである。以上の点を考慮に入れると、恋愛遊戯から深い性の融合へと進化を遂げたように思われる Gilbert には、本人が隠蔽する暗い性の部分が潜んでいるのではないだろうか。そのような観点から本発表では、*Mr. Noon* におけるセクシュアリティの問題に新たな解釈を試みたい。

ロレンス/メルロ=ポンティのセザンヌ論の切り開く地平 ～モダニズム(美術) 批評と「視触覚」

神徳敦子（慶應義塾大学非常勤講師）

ロレンスは自身の画集の序文 “The Introduction to These Paintings” 他において熱のこもったセザンヌ論を展開しているが、彼のセザンヌ論は、同時代の画家・美術評論家であるロジャー・フライのセザンヌ論との対照性が指摘されてきた。一方で、メルロ=ポンティの「セザンヌの疑惑」（『意味と無意味』（1948）所収）とは、近似性が指摘されてきた。本論ではまず、この三者のセザンヌ論がモダニズムの美術史・美術批評においてどのような位置・関係にあるのかを整理し確認する。

その上で、メルロ=ポンティがセザンヌを論じた際の「視触覚」の概念に注目する。視触覚とは、視覚と触覚が協働する感覚のことである。ロレンス研究においては、視覚が否定されて触覚による濃い深い時空・存在に至る言説が注目されがちであるが、彼の言語 / 視覚テキストには「視触覚」を手がかりに読みこめるイメージが見いだせる。更にそれらのイメージは「共感覚」の世界、メルロ=ポンティの言う間身体性の世界にも開かれていることを検証する。*Women in Love* 等の作品や幾つかの随筆を例に、また最後にロレンス自身の絵画も（内容やテーマというよりはむしろ）様式の特徴に注目して取り上げ、別個に論じられがちな文学、美術、及びその境界領域を関連づけることによって、モダニズムにおける知覚の組み換えが切り開く地平を示すことを試みたい。

D.H.ロレンスの押韻詩 “The Piano” の改稿をめぐって

倉持 三郎（東京学芸大学名誉教授）

発表者は最近、ロレンスの押韻詩の改稿の問題に関心を持ち、ロレンス自身が “the foundation of the poetic me” とよぶ、彼の大学ノート全体を印刷本にし、また写真版を作成した。ロレンスはこの大学ノートの作品を改稿して、それを *Love Poems and Others, Amores, New Poems, Bay* で公刊した。

推敲のため改稿したのは分かるが、それ以上の意味はなかったのか。本発表では、改稿をめぐる問題を考察する。改稿された作品の例として I.A.Richards: *Practical Criticism*(1929)

に収録された“The Piano”を取り上げる。この作品の改稿に触れている Pinto、Tom Marshall、Sandra Gilbert の説に触れながら改稿の意味を考える。さらに Richards の説は改稿とどうつながるかも考察する。

“The Piano”の大学ノート版、改稿された *New Poems* 版の双方とも Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts: *The Complete Poems of D.H.Lawrence* (Heinemann,1964)に収録されてある。

ワークショップ

D・H・ロレンスと労働（者階級）

司会 近藤 康裕（慶應義塾大学准教授）

労働者階級出身のロレンスが、労働者階級の眼とそれを対象として視る眼の双眼で工業化の時代を描いたことは、その作品を労働（者階級）というテーマで分析する意義を裏書きしている。ただ、労働者階級とは何かを簡明に言い表すことは容易ではなく、このテーマを論ずるためには、近代資本主義の進展というロレンスの時代の歴史的条件がまず考えられなければならないし、労働そのものの意味も考えられなければならない。さらに、こうした歴史的条件のもとで生じた反応としての労働運動や社会主義を作品がどう表現したか検討する必要がある。

発表では、まずロレンスの代表的長篇 *The Rainbow* の読解によって本ワークショップのテーマがどのようにテキストに表されているかを確認する。続いて、20世紀のイギリス史上きわめて重要な政治家のひとりであるエレン・ウィルキンソンが書いた小説を軸に労働運動と文学の関係を検討し、ロレンスによるゼネラル・ストライキ表象を論じる。そして、同時代の社会批評が痛切な *Kangaroo* を、オーストラリアの地理と歴史に規定された労働に着目して読み解き、ロレンスの社会主義批判とその裏にある思想を炙り出す。各登壇者によって提示される論点に対してのフロアからのレスポンスとそれへの応答を通し、ロレンスの作品とその社会的、歴史的コンテクストとの関係がより鮮明な像を結ぶことを目指したい。

The Rainbow における歴史と労働(者階級)

——テキストはどのように<矛盾>を扱っているか

講師 近藤 康裕（慶應義塾大学准教授）

一昨年の大会のワークショップで示されたとおり、*The Rainbow* は非常に豊饒なテキストである。ある特定のテーマでこの小説を読み、テキストの豊饒さに見合うだけの解釈を示すのは難しい。しかし、労働と階級の問題を顕著に前景化させた産業資本主義の進展の時代と場所を舞台とするこの小説について労働（者階級）という論点から考えることは、歴史がどのようにロレンスのテキストに表象されているのか本質的なところで明らかにすることにつながる。*The Rainbow* は歴史的素材が小説として成立するように加工されたテキストであり、その叙述を通して労働（者階級）に対するロレンスの姿勢を見出すことができる。歴史と小説という違った種類のテキストの間に生じる矛盾をテキストがどう処理しているか検討し、初期から晩年にいたるまで葛藤や抑圧を伴いながらロレンス文学の底に流れていた労働（者階級）の問題をこの代表的長篇がどう表現しているか論じることで、本ワークショップのテーマとロレンスの基本的なつながりを示す導入としたい。

労働争議と小説

——D・H・ロレンスとエレン・ウィルキンソンの「ゼネラル・ストライキ文学」

講師 井上 麻未(聖路加国際大学教授)

ロレンスは1926年のゼネラル・ストライキに触発され、3つのバージョンの Chatterley novels を執筆したが、労働者階級出身であり英国初の女性の文部大臣となったエレン・ウィルキンソン(1891-1947)も同様に炭鉱を舞台に階級が異なる男女の恋愛を *Clash* (1929) において描いた。炭鉱労働争議の歴史研究者がこの小説に着目することはあっても(Sue Bruley 2010)、文学研究者がウィルキンソンの小説の分析を十分に行ってきたとは言えない。ここ数年、エレン・ウィルキンソンの新しい研究書が続けて出版され、*Clash* の従来の読みの見直しをせまられている。英国の多くの作家にとって、2つの世界大戦間のゼネラル・ストライキは最も大きな社会的な出来事であり、近年再び、この時代に作家たちがいかにゼネラル・ストライキを描いたかという研究が行われた。ゼネラル・ストライキを内側から描いたウィルキンソン、外側から描いたヴァージニア・ウルフ、そのどちらでもあるロレンス。本発表では特にウィルキンソンの小説との比較を念頭にロレンスの小説を読み返すことで、ロレンス作品の「ゼネラル・ストライキ文学」(“the general strike’s literature”)としての固有性を析出してみたい。

Kangaroo における社会主義批判

講師 加藤 彩雪(日本女子大学大学院生)

ロレンスはエッセイ「民主主義」の中で、“The Law of Average”という概念を援用しながら、民主主義や国家だけではなく、社会主義に対しても痛烈な批判を浴びせている。言うまでもなく、“The Law of Average”とは、ロレンスのウォルト・ホイットマンに対する批判の中核を成す概念である。本発表では、長編『カンガルー』の中で、ホイットマンへの批判が社会主義の労働問題との関連でなされていることに注目をする。社会主義に対するロレンスの批判は他の小説の中にも見ることができるものの、『カンガルー』で執拗に言及される社会主義は、西洋の労働問題ではなく、オーストラリア特有の労働観を通して語られるという点において、非常に特異である。

オーストラリアの労働は、過酷な自然条件故に、アメリカ的な個人主義ではなく、労働者同士で協力するという「マイトシップ」という概念を生み出した。『カンガルー』の中でロレンスは、マイトシップが社会主義的な労働条件と交叉することに対して危惧を表しているものの、その理由を作品の中で明示することを避けている。本発表では、“The Law of Average”やホイットマンを表象する“Post-Mortem”という概念に言及しながら、社会主義を批判するために何故オーストラリアの労働について言及する必要があるのか、その理由を明らかにすることを目的とする。

シンポジウム

情動、共感、D. H. Lawrence とその周辺

司会 武藤浩史(慶應義塾大学教授)

「情動」をめぐるのロレンスのテキスト読解は、すでに、2010年のロレンス協会シンポジウム「ロレンスと情動・感情・運動」において、ゲスト講師として秦邦生氏をお招きして、飯田武郎、中林正身、新井英永(司会)各会員の参加の下、刺激的な発表と活発な議論が展開されたと記憶する。

だが、その後、情動論はさらなる展開を見せる。2013年には、Frederic Jamesonが「情動」をキーワードとして、モダニズムに繋がる19世紀リアリズム論 *The Antinomies of Realism* を上梓した。2014年には Nancy Armstrong の情動を介した現代小説論（‘The Affective Turn in Contemporary Fiction’）が学術誌に掲載された。そして、今春、いよいよ、遠藤不比人の『情動とモダニティ』（彩流社、2017）が出版された。氏の著書は次のようにはじまる。

一般に「情動的展開（The Affective Turn）」と総称される文化研究あるいは批評理論における視点のラディカルな変換が、近現代の英米文学研究、殊にモダニズム文学研究に不可逆的なインパクトを与えた。・・・なぜ不可逆的なのか？ここでいう「情動（affect）」とは、19世紀的な「個人」が抱く「感情（emotion）」を逸脱する「もの」、あるいは個人的な主観性ではなく「間主観的」な集団性を希求する政治的欲望である——そのような視点を、昨今の情動論は文学／文化研究に導入可能であるからだ。

このような問題意識の下で、ロレンスそしてその周辺を読み直すとどうなるか、というのが本シンポジウムの目的である。

遠藤氏にロレンスを論じていただくのはもちろんだが、さらに、ゲスト講師として、文学的体験の間主観性の意味を探るために、「共感」をキーワードとして、イギリスで盛況を誇る読書会のメンバーへのインタビューというユニークなアプローチを取る井川ちとせ氏を外部から講師としてお招きして、ご発表いただく予定でいる。

武藤は、司会進行役を務めながら、「情動」を軸にして、ロレンスの小説の分析を試みてみたい。

D・H・ロレンスの反心理学、あるいはその情動論的可能性の再読

講師 遠藤不比人（成蹊大学教授）

近刊の拙著『情動とモダニティ——英米文学／精神分析／批評理論』（彩流社）の冒頭で明示したように——司会の武藤氏が引用くださったように——昨今問題となっている「情動」とは、近代心理学と近代文学が併走しながら「心」なるものを制度化し、それを個人の主観へと矮小化したことへの抵抗の契機となり得る概念である。ロレンスに即して考えるのならば、たとえば、彼の『精神分析と無意識』（1921）と『無意識の幻想』（1922）に典型的な過激極まりない反心理学は、この文脈において多くの可能性を蔵している。ロレンスの言語を近代心理学の歴史に位置付け——ダニエル・J・シュナイダーがつとに論じるように彼のこの分野に関する知識は豊富で卓越したものであった——その反心理学、そしてその定義上反（近代）文学、と呼び得る文学的な強度を再考してみたい。最近『否定の文体』と題された秀逸な三島由紀夫論が上梓されたが、まさにロレンス文学とは、反心理学という「否定性」の強度に貫かれた文体それ自体ではないだろうか。

文学的経験と「多元的呑気主義」

講師 井川ちとせ（一橋大学大学院教授）

「よく思い出すのは、イングランドにいたころ、群衆のなかで、ほんの一瞬、ジプシーの女と目があったときのことだ。彼女にはわかったし、わたしにもわかった。なにがわたしたちにわかったのだろうか？わたしははっきりさせることはできなかった。それでも、わたしたちにはわかったのだ」（『古典アメリカ文学研究』）——こうした一節に出会うとただちに、他者を安易に代表／表象する主体の奢りを戒めるのが、知識人の作法となって久しい。しかしもし、他者を尊重することが認識論的不可能性を絶対化することを意味するとしたら、多

元主義的社会を志向する知識人は、複数の他者を、知り得ない客体として等し並みに扱うという逆説に陥りかねない。

ロレンスが記述した名状しがたいある種の交感を、一次的経験として知る読者は、この記述に触れて、経験をまざまざと蘇らせるにちがいない。「わかった」という肯定的直感すなわち共感、主体と客体の二元論では捉えられない、「純粋な情熱的経験」（『無意識の幻想』）であり、その経験の意義を問うことが、Paul Ricouerのいわゆる「懷疑主義的解釈（hermeneutics of suspicion）」の袋小路から、われわれが抜け出す足がかりとなるだろう。

「多元的呑気主義」とは、ロレンスの哲学を揶揄した同時代の批評家の造語“pollyanalytics”に、岩崎宗治氏が当てた名訳であるが、近年の、「幸福主義的転回 the eudaimonic turn」後の文学研究が実践する批評的営為に、たいそうしっくりくる。テキストのナイーブな無意識を暴くことに終始するのではなく、文学的経験を肯定的に解釈する可能性を、本発表では探ってみたい。

Sons and Lovers* と *The Rainbow ——情動と共感とヴィジョンと間主観性

講師 武藤浩史（慶應義塾大学教授）

情動的体験の間主観性については既に触れたが、もう一つの特徴として、身体感覚性が挙げられる。つまり、「悲しい」とか「嬉しい」とか言った安易に言語化されがちな個人的な感情と比して、情動には言語化に抵抗する身体感覚性が備わる。換言すれば、ある種の深さを持つ。その場合、ロレンス文学の中でだれもが一番に思いつくのは、ロレンスがエドワード・ガーネット宛に書いた *The Rainbow* に関する手紙の中で、自分が書きたいのは「炭素」であって「石炭」や「ダイヤモンド」ではないとする、「より深い自己」の擁護であろう。このことは、私の記憶が正しければ、前回の「情動」シンポでも触れられた。

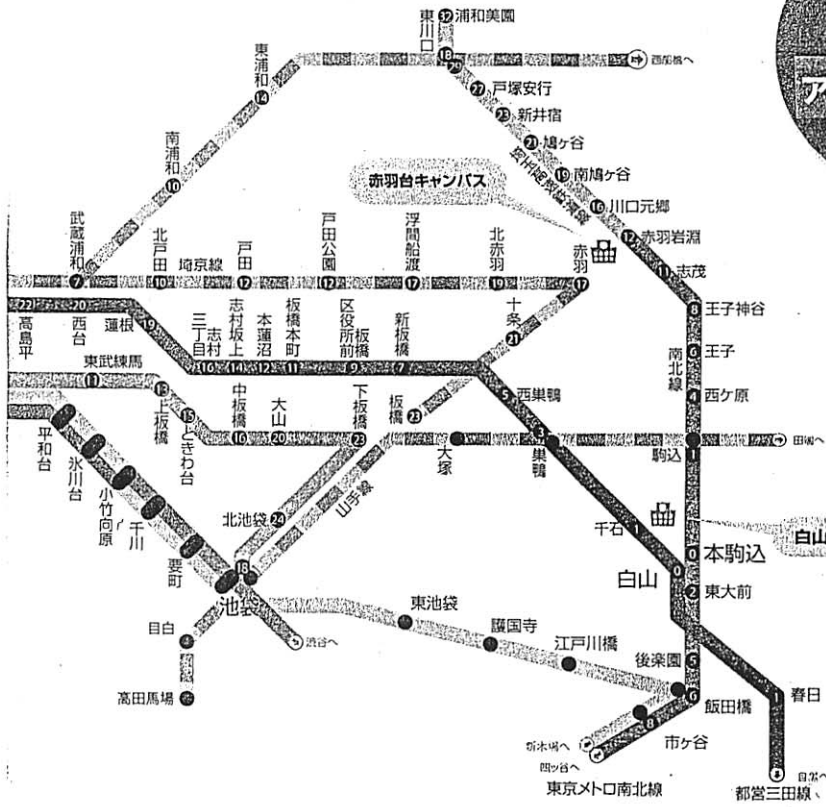
この点に注目しながら、間主観性や共感性の問題を介しつつ、さらに、*Sons and Lovers* との *The Rainbow* の比較も念頭に置いて、ひとひねりした議論を展開したい。

+++++

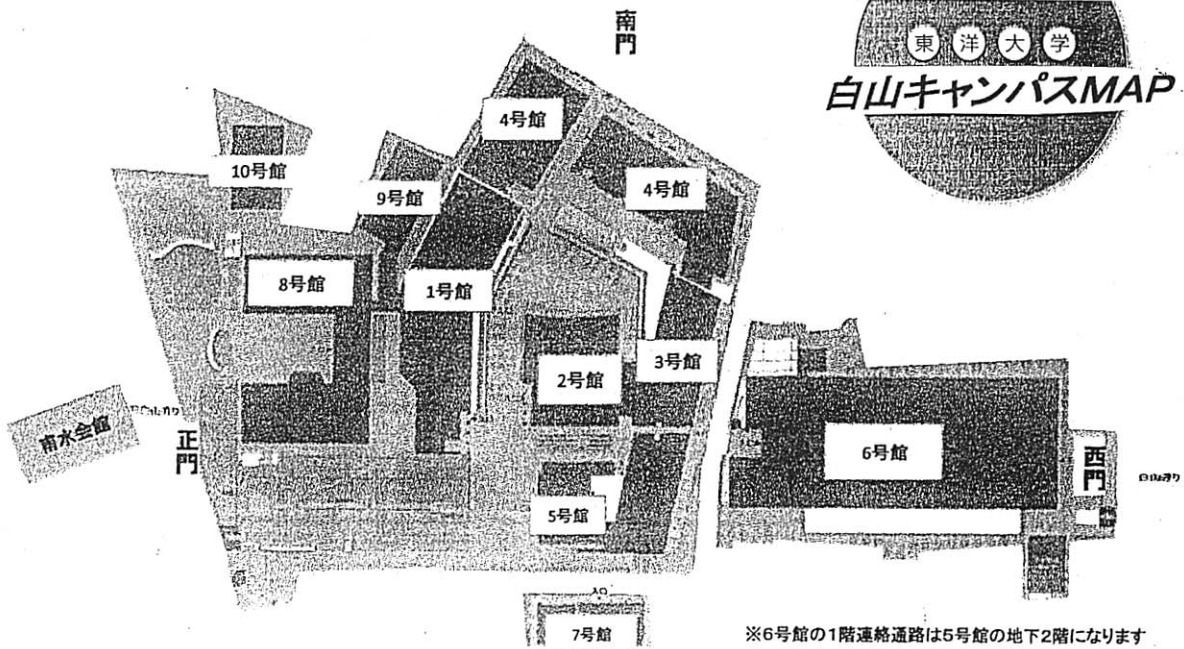
大会会場周辺ホテル情報

- 東京ガーデンパレス：東京都文京区湯島 1-7-5 Tel.03-3813-6290
JR「御茶ノ水」駅より徒歩 5 分
- 東京ドームホテル：東京都文京区後楽 1-3-61 Tel.03-5805-2111
JR/都営地下鉄三田線「水道橋」駅より徒歩 6 分
- ホテルメトロポリタン・エドモントン飯田橋：東京都千代田区飯田橋 3-10-8
Tel.03-3237-1111
JR/東京メトロ東西線、有楽町線、都営地下鉄大江戸線「飯田橋」駅より徒歩 5 分
- リッチモンドホテル東京水道橋：東京都文京区本郷 1-33-9 Tel.03-5803-2155
JR/都営地下鉄三田線「水道橋」駅より徒歩 10 分
- お茶の水セントヒルズホテル：東京都文京区湯島 2-1-19 Tel.03-3831-0081
JR/東京メトロ丸ノ内線「御茶ノ水」駅より徒歩 7 分
- アパホテル巣鴨駅前：東京都豊島区巣鴨 2-9-7 Tel.03-5961-0711
JR/都営地下鉄三田線「巣鴨」駅より徒歩 2 分

東洋大学
アクセスマップ



東洋大学
白山キャンパスMAP



東洋大学

哲学とともに130年
130 years with philosophical mind